

前句付講座 ～伝統的な文芸に触れる～

鮭川村

1 はじめに

鮭川村には鮭川歌舞伎をはじめ、段の下田植え踊りや羽根沢節などといった伝統芸能が根付き受け継がれている。その中の一つに「前句付」と呼ばれる文芸がある。これは「七・七」のお題の前に付ける「五・七・五」を詠み、「五・七・五・七・七」の短歌の形をつくる俳諧の一分野である。元々は連歌の付合稽古として始まったが、俳諧師たちが連歌の普及と浸透を図るため、前句付を広めていったとされる。

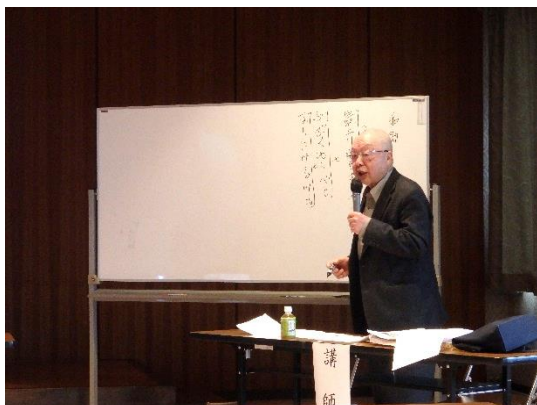
前句付の特徴としては、①季語を入れなくてもよい、②切れ字などの作法に拘らなくてよい、③普段の言葉遣いで詠むことが出来る、④自らの生活そのものを表現できる、といったものがある。俳句のような季語や作法をあまり気にせず、気軽に普段の生活について普段の言葉遣いで表現できる、いわゆる『遊びの文芸』であると言える。この気軽さにより大衆の文芸として広がりを見せた。鮭川村では江戸時代後期には村内で広まり、娯楽として親しまれていた。

かつては村内に多くの句会があり、例会を開いて俳句・前句を詠んでいたが、戦争や戦後の社会変化により徐々に衰退し、現在では『雅秀会』1会を残すのみとなってしまった。今年度、前句付の歴史と手法を学び、後世への継承と普及を目的に、教育委員会主催で「令和3年度鮭川村前句付講座」を実施した。

2 事業概要

講師に村内で活動している俳句の会『雅秀会』の会長、小川邦昭氏を迎え、全3回の講座を実施し、村内外から9名が参加した。

第1回 令和3年11月7日（日） ～「前句付」の歴史と作法を学ぶ～
前句付の歴史と作法について、具体例を挙げて解説を行った。



小川邦昭氏による講義



講義を聞く参加者

第2回 令和3年11月14日（日） ～「前句付」に描かれた情景・心情を紐解く～

「鮭川村奉額句集」を参考に、前句に込められている情景や心情を読み解き、前句を詠む際のヒン

トを解説した。講座の最後に第3回の句会で披露する前句を考えてくるためのお題を出題した。



情景・心情についての講義

第3回 令和3年11月21日（日） ～「前句付講座」句会～

第2回で出題したお題に付ける前句を披露し、参加者全員で鑑賞を行った。



参加者が詠んだ前句の鑑賞

記念写真（講師を囲んで）

3 成果と課題

○成果 … 参加者のほとんどが「前句付」を知らない中での講座であったが、歴史や作法、面白さについて理解することが出来たと思われる。また、「季語がなくてもよい」ことや「日常の言葉で詠むことができる」といった前句付の手法が参加者に伝わったと思われる。結果、第3回の句会で参加者が多くの前句を披露することが出来、大変有意義な講座となった。

●課題 … 今年度初めての実施であったこともあったが、参加者が少なかった。前句付を知らない人が多いため、その魅力と面白さを十分に伝えられなかったためと思われる。また、前句付は俳句の「五・七・五」の形式をとるため、その学習を行っていない小学校低学年にはハードルが高いものになってしまった。今後、これらの課題について精査し、事業を行っていききたい。

4 今後について

今年度は前句付に触れる、という目的はある程度達成できたと思われる。今後はこれを糧に前句付の大会や句会などを行い、前句付の文化を村民に広めていきたい。

鮭川村スポーツ少年団交流大会

鮭川村

1 はじめに

本大会は、普段別々で活動している村内スポーツ少年団が競技の垣根を超えて交流することを目的として始まった。今回で41回目となり、歴史ある事業である。

合同入団式は、教育委員会が主催で、各单位団の指導者に運営の補助をお願いしている。

各单位団での活動は活発に行われているが、連合体としての「鮭川村スポーツ少年団」の活動が、この交流大会と合同入団式の2事業に集約されている。



2 事業のねらい

実施当初は、各小学校にあったスポーツ少年団が、学校の垣根を超えて交流することにより、親交を深めることが目的であった。しかし、現在は小学校も統合して1つになり、普段は同じ学校で生活している団員たちが種目を超えた交流と体力の向上を目的とすることにねらいをシフトしてきた。

3 事業の概要

***** プログラム *****

開 会

- 1 あいさつ 副本部長
- 2 選手宣誓 代表単位団キャプテン(当番制)
- 3 日程説明・諸連絡 事務局
- 4 準備体操 単位団(当番制)
- 5 体験会
- 6 アクティブ・チャイルド・プログラム

閉 会

本部長賞贈呈 副本部長



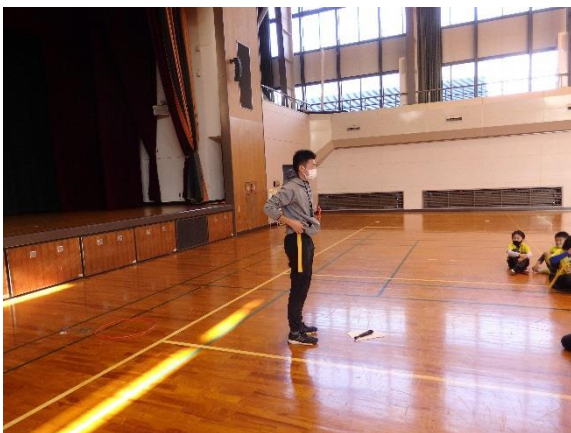
4 評価

今年度の交流会は、今までの事務局が用意した軽スポーツを体験するのではなく、各単位団が普段どのような練習をしているかをお互いを知るため、体験会を開催することとした。

体験会を開催することで、お互いの競技を知ることができる。指導者も専門用語などをよりわかりやすく、未経験者に伝える必要があるため、スキルアップに繋がることを目的とした。30分と短い時間ではあったが、参加者は普段と違う種目、動きを楽しんでいる様子であった。

また、今回はアクティブ・チャイルド・プログラムを取り入れた。新庄市から講師を招き、子どもたちの俊敏性と体力の向上をはかる、「タグ取り合戦」(しっぽ取り)を総当りで行った。待機しているチームは作戦を練ったりして戦略を立てている様子がうかがえた。

近年の交流会は、毎年内容を変えている。これからも事業を継続する中で、指導者、団員双方にプラスとなる内容を企画することが必要である。



戸沢学園学校運営協議会の新たな取り組み

戸沢村

1 はじめに

平成29年度より小中一貫校として、学校運営協議会の活動を行ってきた。令和2年度の最終の運営協議会の中で、この間の活動の問題点や課題を洗い出した。取り上げられた課題は、以下の通りである。

「学校運営と学校運営協議会の同一方向での取り組み」

「協議会での熟議」

「委員の学校経営参画意識の高揚」

この問題点を解消すべく改善策が打ち出された。これらの課題を打開すべく令和3年度新たな取り組みが行われた。

2 事業のねらい

学校が一つになってから、地域から学校が遠くなったという声が住民からあった。学校が地域からなくなることの影響が地域にも学校にも出ているものと感じる。共育の推進を進めてきた戸沢村として、やはり地域と学校とのつながりを新たに考える機会として学校運営協議会を通じて部会を開いた。

教育の柱である「心」「知」「体」の3つの部会構成でより具体的な内容の熟議をし、実践検証を行った。また年4回の全体会での協議の場から、全体会3回、部会3回とし、より参画意識を高める形態をとった。戸沢学園学校運営協議会に校長が期待することとして、「地域が学校を創り、学校が地域を創る。」という姿をあげた。学校運営協議会としてもそこを目標に活動を展開していくことを共通認識とした。

3 具体的な取り組み

部会は、委員の集まりやすい夕方の時間帯に会議を開いた。各々の部会の特徴として、「心部会」は命の教育、生徒指導に関わる教育活動。「知部会」は、共育カリキュラム・学力向上に関わる教育活動。「体部会」は、体力・健康・食育などに関わる教育活動をテーマとしている。2回目の部会を経て部会で行うべきことが形創られてきた。

「心部会」において、「あいさつ日本一の学校 戸沢学園」を合言葉に、あいさつ・礼儀についての取り組み、自治活動への積極的・自発的な取り組みにつなげたい、などの課題が見えてきた。

「知部会」においては、地域との連携の中で地域と学校がともに元気になる取り組みを行いたいという意見がでた。放課後子ども教室でお試し行事を行うアイデアや、戸沢学園応援隊を結成して、行事や畑作りなどを住民ボランティアが行う、地域と学校をつなげるアイデアが出された。

「体部会」では、柔軟性・持久力が低いなど体力の学年間格差があり、二極化して

いる状況があるということから、運動量を意識できるように万歩計を持ったり、親を巻き込んだストレッチ・散歩など親子で運動する習慣をつけたりする提案や意見が出された。

全体会で、提案があった中で実現できることをまずやろうということで、4つの事業を行うことができた。

4 成果と課題

まず一つ目に、「心部会」において「あいさつモニター」としてスクールバス停・初等部玄関にて部員があいさつ運動を行った。学校外でも元気にあいさつをするという意識付けとなった。

二つ目に、「体部会」において自分の体を知るということで、5学年から9学年の児童生徒対象に体力測定器「インボディ」を使って、身長・体重・筋肉量・体脂肪率などの測定を行った。今後、万歩計を貸し出すなど運動意識を高める取り組みを行い、再度「インボディ」による計測を行っていく予定である。

三つ目に「知部会」において「元気づくりスクール」として初等部3・4年生対象に放課後軽スポーツをして遊ぶという取り組みを行った。ボール遊び・長縄でのゲームなど、講師の工夫を凝らしたメニューで元気いっぱい体を動かしていた。4回の開催であったが、大変好評で次年度の開催もしてほしいとの要望があった。

四つ目に『「クリスマスの夕べ」～ピアノと歌と読み聞かせ～』を戸沢学園「戸沢ホール」にて参加希望の住民50名を対象に開催した。学園の教職員のピアノと歌の発表、読み聞かせサークル「くれよん」のクリスマスの読み聞かせなどを行い、クリスマスの素敵なひと時を住民と学校で共有できた。

今年度の取り組みを核として、さらに学校を中心とした地域づくりを展開していく予定である。



絵本作家講演会 ようこそラーワーちひろワールドへ

戸沢村

1 はじめに

戸沢村では平成30年度より、現行の戸沢村読書推進計画を作成し、「読書の村 とざわ」のスローガンのもと様々な活動を行ってきた。その活動の一環として、絵本作家講演会を実施した。今回は鮭川村在住の絵本作家ラーワーちひろ氏を講師として招き、小学生以下の子供がいる親子を対象として講演会を実施した。

2 事業のねらい

絵本作家を講師として招き講演会を行うことにより、多くの村民が本に触れるきっかけを作り、実際に絵本作家が伝えたい意図や考え方を聞くことによって、絵本への関心や読み聞かせの意欲をもつことをねらいとしている。

3 具体的な取り組み

- (1) 期 日 6月12日(土) 10:00~11:30
- (2) 場 所 戸沢村中央公民館 3階大会議室
- (3) 主な日程

9:30	10:00	10:05	10:40	11:25	11:30
受付	開会、アイスブレイク	読み聞かせ・講演会	ワークショップ	質疑応答、閉会	

① 開会、アイスブレイク

開会行事の後に、講師であるラーワーちひろ氏の講師紹介の時間を設けた。

また、アイスブレイクは、親子で一緒に自由に絵を描くという内容で行った。特にテーマを決めずに親子で一緒に話し合いながら絵を描くことで、親子の交流の時間を設けることが出来た。また、この時間を設けたことにより参加者はリラックスしてその後の講演会やワークショップに臨むことが出来ていた。



② 読み聞かせ・講演会

講演を行う前に、ラーワーちひろ氏が作成した絵本の読み聞かせの時間を設けた。

今回はコロナ対策として、読み聞かせの際に密にならないように、広い会場を準備し、人と人の間隔を広くとった。そのため、絵本が見づらくなる可能性があったため、スクリーンにプロジェクターで絵本を写すという形で読み聞かせを実施した。

ラーワーちひろ氏が普段どのように絵本を制作しているのか、自分がどのような思いで絵本を作成しているのかについてスライドショーを使って作業の様子を紹介しながら講演を行った。



③ ワークショップ

参加者をいくつかのグループに分け、「うちの子はこんなモンスター」という題名でワークショップを行った。自分の子どもは日々こんなことをして困っているということをグループ内で発表することで、自分が抱えている子育ての悩みを共有する時間にもなっていた。

最後に全員の前でうちの子はこんなモンスターであると発表する時間を設け、発表してもらったモンスターについては、ラーワーちひろ氏にその場で絵にしてもらった。



④ 質疑応答・閉会

質疑応答では、絵本の制作に関する質問や次回作に関する質問、その他にもラーワーちひろ氏の子育てに関する質問など様々な質問があった。最後にお礼の言葉と参加者の代表から花束の贈呈を行い閉会となった。



4 成果と課題

(1) 成果

絵本作家を講師として招き、絵本作家の伝えたい意図や考え方を実際に聞いたことにより、本に関心を持った参加者が多かった。また、今回の講演会では、親子での触れ合いの時間や「うちの子はこんなモンスター」という内容のワークショップの時間を設けたことにより、参加者が子育てに関する悩みを共有し、改めて子育てについて考えるきっかけにもなっていた。

(2) 課題

チラシやポスターなどを使って広く参加の呼びかけを行ってはいるが、参加者が他の読書イベントでも来てくれる方達で固定化してきている状況であり、新規の参加者が参加してくれるように工夫していく必要がある。

5 おわりに

今年度はコロナ禍という状況ではあるが、県内で講師を探したり、広い会場を用意したうえでコロナ対策を行うなどの工夫をしたりして、絵本作家講演会を開催することが出来た。また、活動を通して親子の触れ合いを充実させ、本に触れるきっかけを作ることが出来た。今後も新型コロナウイルス感染症の状況を見ながらではあるが講演会を実施していきたい。

感動体験が大きなチカラを与えた「アドベンチャーキャンプ 2021」

山形県神室少年自然の家

1 はじめに

「アドベンチャーキャンプ」は 6 泊 7 日の長期にわたって非日常のダイナミックな自然体験活動「アドベンチャー(冒険)」と、異年齢集団による共同生活を通して、感動体験をさせることで、子ども達の生きる力を育むことをねらいとした事業である。

また、コロナ禍により、様々な活動に制限が加えられているからこそ、野外活動というフィルターを通した共同生活体験を行い、仲間意識を高め、自主性や協調性、自ら困難を克服する力を育成し、物事を達成した時の充実感を味わわせたいと考えた。



2 事業のねらい・日時・参加者・活動場所・内容

(1) ねらい

- ① 大自然の中で、長期の自然体験活動をすることで、たくましく生きようとする態度を養う。
- ② 仲間と協力しながら、さまざまな体験や困難に立ち向かうことで、仲間のよさや新たな自分のよさに気づかせる。
- ③ 仲間や自然と向き合う中で、見通しを持ちながら物事に取り組み、自らの力で困難を克服する力を育む。



(2) 日 時 令和3年8月1日(日)～8月7日(土)

(3) 参加者数 20名[小学生4年生～中学生3年生(男子10名、女子10名)]

(4) 活動場所

ベースキャンプ : 神室少年自然の家

活動エリア : 真室川町(塩根川・八敷代地区) 新庄市(杳蔵山)

(5) 活動内容

<1日目> 8月1日(日) ○出会いのつどい ○アイスブレイク ○オリエンテーリング ○ソロ野外炊飯(カレー)
<2日目> 8月2日(月) ○川遊び(八敷代):ラフティング、ボート遊び、魚捕まえ ○ソロ野外炊飯(中華丼)
<3日目> 8月3日(火) ○段ボールピザ(カレーチーズピザ) ○ソロ野外炊飯(牛丼) ○ビバーク泊
<4日目> 8月4日(水) ○川遊び(塩根川 B ポイント):ラフティング、ボート体験、魚捕まえ ○登山準備
<5日目> 8月5日(木) ○杳蔵山登山・夕食(ハンバーグカレー) ○星空観察 ○杳蔵山見晴台ビバーク
<6日目> 8月6日(金) ○ご来光 ○朝食(パン)・下山 ○アドキャン成果発表会 ○キャンプファイヤー
<7日目> 8月7日(土) ○ソロ野外炊飯(神室ドック) ○思い出クラフト制作 ○別れのつどい

3 企画・実施の配慮事項

- ・ 寝食を共にする長期共同生活体験を野外活動(川や山をステージにした自然体験活動、野外炊飯等の調理体験等)を通じて行うことで、他者意識、仲間意識、協調性等に気づけるようにプログラムを仕組んだ。
- ・ 活動エリアの下見、実地踏査を行い、様々な状況に対応できるように備えた。
- ・ キャンプの自然体験活動が川・山等を利用した難易度の高いものなので、参加者の体調管理等をスタッフができるように、山岳救助トレーニングや熱中症予防についての研修を行った。

4 テーマ「感動体験で大きなチカラを」のしかけの工夫

(1) ダイナミックなプログラムの作成

- ① 「勇氣岩」と呼ばれる川岸の高いところからジャンプする体験など、大自然にとびこんで挑戦する7日間の活動を、苦勞しながらも仲間とともに努力し乗り越えたことによる達成感が感じられるようにした。
- ② 早朝、杵蔵山での雲海の中、ご来光を見るなど、ダイナミックな自然体験活動を通して、自然の素晴らしさや神秘を感じられるようにした。



(2) 絆が深まるよう、異年齢による班構成

- ① 班長である中学生がリーダーシップを発揮し、班員の絆を強め、別れのキャンプファイヤーでは、さみしさがこみあげる場の設定をした。
- ② 目標、体験、振り返りのPDCAサイクルを大切に、集団としての意識と自己肯定感が高まるような流れを工夫した。



(3) ボランティアスタッフからの見守り活動

- ① 6泊7日すべてに参加するスタッフには、職員とパートタイムスタッフとのつなぎ役を務めてもらった。
- ② ボランティアの支援の形態を「班付スタッフ」から「子どもたちの自主運営を側面から支援するスタッフ」に変えることで、都合のつく日程で支援してもらうことができた。



5 成果(○)と課題(△)

(1) 参加者の声

- 自然には危険なことがあるけれど、いろいろな生物を見つけ、山の美しさや面白さを感じた。
- 初めは、自然は虫がたくさんいたり、危ないこともあったりして、いやだなと思った。けれども、星空を見たり、自分で作ったご飯がすごくおいしかったり、今まで感じたことのないことを、たくさん感じられた7日間だった。
- 進んでチャレンジしたことで成長できたと思う。だから、普通の生活に戻っても、いろいろなことにチャレンジすることを大切にしていきたい。
- 最初は、初めてあった人の外見ばかり見ていたけど、7日間生活したら、性格がたくさんわかって、すごく優しい人ばかりなのだなと感じた。

(2) 担当者から

- 初日から体調管理の大切さを伝え、常に声がけをし、意識して生活させたことで、体調を崩す参加者が一人も出ず、全員が全プログラムを行うことができた。
- 中学生や小学校6年生の参加者がリーダーとしての役割を担い、4、5年生がそれを見て、手本として行動するなど、異学年交流の機能が働いていた。
- ソロ炊飯を初日から3日連続で行ったことで、作業の手順を覚え、作業スピードがあがり、グループのメンバー同士で手伝う場面があった。また、班の中で自分の役割を考えて行動するなど個人の成長が見られた。
- △計画の遅れによって、ボランティアへの募集の連絡時期も遅くなってしまい、結果、ボランティアとのプログラムの共有などを十分に図れなかった。

6 終わりに

幼児期から思春期にかけての深い感動は、その後の人格形成に大きな影響を与えたり、これまでの考え方や価値観、行動を一変させたりするチカラがある。神室少年自然の家周辺は、山や川など豊かな自然に囲まれている。このように恵まれた自然の中で、子どもたちがいきいきと活動し、互いをかけがえのない存在として敬い、成長する機会を提供していくことが、当所の役割である。今後も多方面から支援・協力を得ながら、感動体験が与える大きなチカラを育むよう努めていきたい。